奈良文化財研究所創立50周年記念事業

創立50周年記念国際講演会

東京都美術館で開催中の『飛鳥・藤原京展』に合わせて、8月17日（土）に「東アジアの古代都城」をテーマにした国際講演会を、東京上野の都美講堂でおこない、盛会裡に終わりました。演者は中国社会科学院考古研究所の劉慶柱所長、安家瑤さん、何歳利さん、韓国からは国立文化財研究所を退官したばかりの趙　由典・前所長、慶州国立文化財研究所の李恩碩さん、それに奈文研の町田所長、金子部長、井上の8名。基調報告、研究報告と、朝から夕方まで目白押しに続いた講演にもかかわらず、最後まで満席の状態で、運営をサポートしたクバプロの担当者からも感嘆の声。聴衆は事前に応募して当選した方に限られていましたが、それでも開演時間よりかなり前から入り口には長蛇の列がみられ、一般の関心の高さがうかがわれる光景でした。

夕刻にはゲストの宿舎で懇親会を催しました。文化庁や東文研などからも多くの方々が集い、日本、中国、韓国の古代都城に思いをはせながらの真夏の夕べのひとときをともにしました。

（平城宮跡発掘調査部　井上和人）

李　恩碩さんの講演

『飛鳥・藤原京展』

50周年事業の一環として『飛鳥・藤原京展』を開催しています。飛鳥・藤原地域の調査と研究の成果を通観し、激動の7世紀をダイナミックに描き出した展覧会です。国宝・重要文化財を含む約140件の文物を展示しています。

本展は全国4カ所を巡回しますが、その道のりも半ばを過ぎました。秋は宮城県多賀城市の東北歴史博物館（10月11日～12月1日）、冬は三重県四日市市の四日市市立博物館（12月21日～翌年3月9日）へと会場を移します。

大阪歴史博物館では4万人を超え、東京都美術館では約10万人の観客動員数を達成しました。

大阪で来客アンケートを実施したところ興味深いデータが得られました。回答者の住まいは大阪府が50%を占め、兵庫県、奈良県、京都府と続きます。展覧会を知ったのは新聞26%、人に聞いて24%、ポスター22%で、新聞や広告とともにクチコミも大きな効果があるとわかります。インターネットはわずか4%でした。満足度はとてもよい30%、かなりよい45%、合計75%に達し、ほとんどの来場者に好評をいただきました。年齢層は60歳以上が26%と最も多く、10歳代8%、20歳代7%、30歳代と40歳代は6%でした。明日の日本を担う世代は、古代の日本に関心が少ないのかも知れません。

多くの意見も寄せられました。展示品が少ない、多すぎるという相反する意見や、解説をもっと詳しく、もっと平易にという声があります。一方で、よくまとまっている、わかりやすい、という意見も多

数ありました。復元模型やＶＴＲも不評と好評と両方の意見があります。万人が満足できる展示はむずかしいと痛感しました。全体としては好意的な評価が多く、まずまず成功といえるでしょう。本展をみて興味をもち、実際に現地を訪れた方が飛鳥藤原宮跡発掘調査部の展示室にもお見えになっています。

また本展と関連して、大阪・東京会場に出展した金銅製四環壺（明日香村古宮遺跡出土、宮内庁三の丸尚蔵館所蔵）の調査を宮内庁と奈文研が共同で実施しました。このように展覧会とともに新しい研究もおこなわれています。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　石橋茂登）

発掘調査の概要

興福寺中金堂院回廊東南の調査（平城第347次）

興福寺の主要伽藍を対象とした復元整備計画にもとづき、これまで中金堂院の中門（1998年度）、回廊東北部・中金堂前庭部（1999年度）、中金堂（2000・2001年度）の発掘調査をおこなってきました。今回は回廊東南部を発掘しています。調査面積は981㎡、2002年7月1日から調査を開始しました。この調査により回廊の全容が明らかになりました。

東面回廊は全長約65ｍ、中門を含む南面回廊の全長は約84ｍあります。今回の調査で検出したのは東面回廊南半の桁行8間分、南面回廊東半の桁行6間分です。梁行は東面、南面回廊とも2間で回廊基壇の幅は10.74ｍです。柱の礎石はほとんど残っていませんでしたが、礎石の抜取穴によって柱の位置を確認できました。回廊は連子窓が中央に通り、その両側に吹き放しの廊下がある複廊の構造であったことがわかります。

東面回廊西側と南面回廊北側では基壇側面を飾る外装と雨落溝（あまおちみぞ）を検出しました。凝灰岩製の地覆石とその上にのせる羽目石の下端部が残っており、全体は壇正積（だんじょうづみ）基壇であったと考えます。雨落溝（あまおちみぞ）は川原石を2列に並べて底石とし、側石を立てています。溝の内庭側には川原石を敷き詰めた幅90㎝の石敷がありました。

今回の調査区で東面回廊の最も北の柱間にあたるところに、内庭側に下りる階段の痕跡を検出しました。階段北側の地覆石があり、雨落溝は階段の出にそって西に張り出しています。この階段の存在によってここに門が開くことを推定できました。階段の幅は約4.1ｍ（奈良時代の尺で14尺）、門の柱間も14尺であったことがわかります。

門は東面回廊の中央より一間南に位置し、これを境に北と南では、桁行の柱間寸法が異なっています。これは最初に門の位置を決めて、門を基準に回廊を北と南に分けて、必要な間数で割り振るという設計順序の結果であろうと考えます。さらに門の中心線を東西に伸ばすと東金堂と西金堂の中心と一致します。東西の金堂は中金堂院より遅れて造営されていますから、この両金堂は門から延びる軸線を基準に設計されたことがわかります。つまり門の位置は回廊を設計する基準であるとともに、周辺の伽藍を設計する際にも基準となっていたと考えられます。

今後は回廊基壇の時期や構造、回廊内側の内庭部分の状況を把握することを中心に、調査を継続します。　（平城宮跡発掘調査部　今井晃樹）

調査区全景（西から）

平城宮第一次大極殿院西楼出土の木簡

西楼の調査で多数の木簡が見つかっていることは前号で報告しましたが、その後も現場から持ち帰った木簡を含む土から遺物を洗い出す作業を続けています。持ち帰った土はコンテナに400箱あまりです。

木簡が見つかった穴は、西楼の全部で16基ある掘立柱の柱穴のうち、実に13基に及びます。柱抜き取り穴は深さ3ｍにも及ぶ巨大なものですが、深さ1ｍあまりのところに帯状に堆積した木屑層があり、木簡は主にこの層から出土しました。どの穴も抜き取り穴を埋める最終段階で、木簡を含む木屑を集中的に投棄しているようです。ただ、地下水の状況があまりよくなく、木簡は本来もっとたくさんあったと考えられますが、木屑層が腐蝕してしまっている柱穴も多数ありました。

この他、大極殿院南面の築地回廊の造営に先だっ